

---

# 記憶屋

サザビー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

記憶屋

### 【Nコード】

N0196E

### 【作者名】

サザビー

### 【あらすじ】

幼い頃からイジメを受けていた太郎は、彷徨い歩いていた街で一人の女性と出会う。彼女に誘われて入った店にあったのは、数えきれないほどの人形だった。

## 1：出会い（前書き）

なんで僕だけ・・・。

## 1：出会い

僕の名前は加納太郎。

子供の頃から、この名前が原因でよくイジメられた。

小学生の頃、学校の横に駄菓子屋があった。  
皆、学校帰りにはその駄菓子屋に行き、小遣いの範囲内で駄菓子を買って食いついていた。

『子供がなかなか家に帰ってこない。』

保護者からの学校への問い合わせ。

学校帰りの買い食いは禁止になった。

そんな中、アイツらは僕に強要したんだ。

『い、いやだよ。見つかったら怒られるよ。』

『大丈夫だつて。ちょっと裏門乗り越えて「うまか棒」のウニ味買ってくるだけだつて。』

『お前だつたら可能だろ（かのうたろ）？』

『そうそう、加納だろ？』

体が小さく気も小さい、ケンカも弱い僕に、齒向かう術はなかった。

- - 僕が何をしたつていうんだ - -

親ならば、子供の将来をよく考えて名前を付けるべきだ。子供には子供の社会がある。考え方がまだ幼い者達の社会。時に彼らは、その未熟な頭では想像出来ないほどの悲しい事件を起こしてしまう。それは高い確率でイジメという出来事がきっかけで起る事が多い。

子供社会に多く発生するイジメに対し、どれだけの大人が立ち向かっているだろう？子供のイジメを止められないのであれば、せめてその発生源となるかもしれない「子供の名前」というものに対して、

もう少し思考を働かせて欲しいものだ。

おかげで僕は、高校生になった今も、あだ名は『ダロ』だ。

今日も、同じクラスにいる柔道部のヤツらに、練習台だと言って投げ飛ばされた。

『ダロならどんなに強く投げても大丈夫だよな？』

『そうそう、どんな技でも受け身加納ダロ？』

・・・ふざけやがって・・・

家に帰った僕は、むしゃくしゃした気分をどうにかしたかった。家の中で出来る限りのストレス発散法を試したが、少しも気分が晴れない。

『・・・外へ・・・行ってみるか。』

汚れた制服を私服に着替えて、財布だけ持ち、家を出た。

- - むしゃくしゃする - -

カラスの鳴き声。

- - つるさい - -

外で遊ぶ子供の声。

- - つるさい - -

救急車やパトカーのサイレン。

- - つるさいっ - -

『.....あれ?』

ふと気付く。

何処をどう歩いてきたんだ？

どの位の時間が経った？

わからない。

『・・・何処だ、ここ？』

随分と長い時間歩いていたのか、日は沈んでいる。

人気のない住宅街。

街灯も少なく、公園でもあるのか木が生い茂った通りに出た。

『・・・なんか、気味悪いな。』

『そう？』



『うわぁ!?!』

耳元で囁かれた僕は、思わず飛び退いた。

目の前には髪の毛の長い女性が立っている。後ろで束ねた黒髪を右胸の辺りに下ろし、紅いドレスを着ている。歳は20歳位、大きな瞳が印象的のとても綺麗な女性だ。何の匂いだろう?香水かな?とてもいい香りがする。

『ごめんなさい、ビックリさせちゃったみたいね?』

『えっ?あ、いえ』

『中学生がこんな遅くに何やってるの?』

中学って。

高校生なんだけど・・・。

『えっと・・・』

『あ、私?私は華織。みかみかおり観神華織かんじんっていうの。この近くのお店で働い

てるの。キミ、名前は？」

『あ、僕は――』

（可能ダロ？）

――くっ――

『――か、・・・加納・・・太郎です』

『太郎君ていうんだ？いい名前ね。』

え？

――どくん――

いい名前？

――どくん――

な、なんだ？

・ ・ ・ どん

なんで、今更？

『 ・ ・ ・ ・ ・ ねえってば？ 』

『 えっ？！ ！ ！ 』

『 キミ、もう遅いし、私の店すぐそこだから泊まっていきなさい。 』

『 えっ？店って？ 』

『 あ、別に水商売とかじゃないよ。別にお金も取らないから安心して。いきましょ。 』

『 えっ、あ、あの 』

返事も待たずに行ってしまった。

どうする？・・・行くか？

『ま、待ってください。』

僕は、彼女についていく事にした。

2：来店（前書き）

コレさえあれば・・・。

## 2：来店

『・・・着いたわ。ココよ。』

その店は、ホントにすぐそばにあった。

外観は赤いレンガ造り、窓はステンドグラスになっている、ちょっと変わった感じの建物だ。

- - - - - 趣味悪 - -

玄関に立つと足元には看板が立て掛けてある。

『・・・記憶屋？』

- - - - - なんだそれ？ - -

『さ、入って』

『は、はい』

- - ガランツ - -

喫茶店か何かかな、と思いながら僕はドアを開ける。

- - ! ! ? - -

驚いた。

中はそんなに広くなく、丸テーブルが3つ、それぞれに椅子が4脚  
つつ置かれている。

奥の壁は一面が棚になっており、そこには何百体もの人形が飾られていた。

『そこに座って待ってて。今、紅茶入れてくるから。』

『あのっ』

『どうしたの?』

『あの人形・・・』

『ん？あー、あれ？あれがウチの商品よ。』

『商品？人形屋？』

・・・喫茶店じゃないのか？・・・

彼女は軽く首を振り僕の言葉に対する否定を表すと、優しい口調で語りだした。

『記憶ってあるでしょ？ウチはそれを扱っているの。』

『えっ？』

・・・何？どついつと？・・・

『記憶って頭の中にあると思ってるでしょ？』

『ち、違うんですか？』



『正解!』

- - 馬鹿にしてるのか? - -

『・・・なんだけど、アルツハイマーとかになると記憶がなくなっちゃったりするでしょ? そうなる前に外に取り出してバックアップしたり、それを自分の頭に戻したり、他人の頭に入れたり出来るの。科学はすごい進歩を遂げているのよ。知らなかった?』

全くの初耳だ。

嘘つきにも程がある。

『・・・何、その目は? キミ疑ってるわね? じゃあ試しにやってみましょうか?』

ちよつとこつちに来なさいと、彼女は隣の部屋に僕を促した。

隣の部屋はかなり広く、学校の図書室のように本棚がドミノのように並んでいた。ひとつ違うのは、棚の中身が本ではなく人形という点だけだ。

- - うわ、気色悪 - -

『えーっと、どれがいいかなあつと。あつ、コレ・・・はダメか。えーと・・・ん？あつ、コレなんかいいかも。許可得てるし。』

彼女は棚から1体の人形を取り出してきた。

その人形は上半身裸で短パン、手にはグローブをはめていて、見るからにボクサーの姿をしている。

『じゃ、そこに座って』

そこにも、初めに入った部屋と同じテーブルが並んでいた。

椅子に座った僕に、彼女は人形を渡して言った。

『その人形のおでこの部分を自分のおでこにくっつけて。』

言われた通りにする。

『で、頭にあるスイッチオン！』

カチッ

『!!!!!!?』

- - オンギァア、オンギァア - -

- - ヒデ君、お誕生日おめでとう! - -

- - 好きです。付き合ってください! - -

- - お前なら出来る!一緒にチャンピオンを目指そう! - -

- - どうしたコラア!もう音を上げたかあ!?! - -

・・・・・・・・！！

『・・・・・・・・・・はい、終了。・・・どうだった？今のは、鬼島英樹という人間の記憶よ。』

『はい』

『いやに素直ね？あ、そうか、キミは今鬼島英樹の人生を体験したんだから説明の必要はないか？』

人生を体験。

まさにその通りだった。

僕は今、鬼島英樹という人物の半生を体験した。

鬼島家に生まれた英樹。子供の頃から喧嘩三昧。ルックスは良く、女性からは人気があった。高校に入り、先輩からボクシングの誘いを受け、高校生チャンピオンになったあと位で、僕は現実に戻った。

『まあ、記憶の中にあつたと思うけど、彼は父親が若くしてアルツハイマーになったのを機に、両親と共にウチで記憶を保存したの。この指輪を付けると、記憶保存の媒体となるこの人形に、記憶をバックアップする事が出来るのよ。勿論、指輪を付ける以前の記憶も保存出来るわ。』

なんかよくわからないけど、すごいな。他人の人生を実体験出来るなんて。

『ああと、いけない。大事な事言ってなかった。』

- - ? - -

『他人の記憶を体験すると、その記憶で経験した知識は勿論、身体的な記憶も取り込む事になるのよ。』

- - ん? . . . というと? - -

『うん? わかんないみたいね? えっと . . . . . えいつ』

彼女は突然僕の服を捲り上げた。

『なにす - - 』

- - ん? - -

『ね?』

驚いた。

腹筋が割れている。腹筋だけじゃなく、気付くと腕や足の筋肉も太くなっている。まるでボクサーのように。

自慢じゃないが生まれてこのかた、筋肉トレーニングなんて数える程度しかしたことないのに。

『ということよ。びつくりした? まあ、心と体は一体って事よね。心が、やってもいない筋肉トレーニングを記憶した事で、体もやっただと思ひ込んだって感じかしら。』

『す、すごいですね』

- - これでイジメられなくて済む - -

『でしょー?! やつとわかったのね、ウチの店がすごいって。』

『ほ、他にはどんな記憶があるんですか?』

『・・・んー、悪いけど、もうダメよ。』

・・・なんだって? ・・・

『さっきは勢いで体験させちゃったから取らないけど、結構これってお金がかかるのよ。』

『い、いくらですか?』

『まあピンキリだけど、さっきのは50万位かな。』

・・・50万・・・

『あと、これも言い忘れてたけど、この他人の記憶を体験する行為には欠点があつて、自身の記憶が少し欠けてしまうのよ・・・』

・・・コレさえあればもうイジメられなくて済む・・・

『・・・ねえ？聞いてる？』

・・・なのに・・・

・・・ん？なんだ、あの棚は？

他の棚に比べてあそこだけやけに綺麗だ。様々な装飾で彩られている。人形は数体だけ飾られていて、よく見ると外から見えたステンドグラスの窓が出窓になっていて棚として使われているらしい。

・・・特別品・・・か？

僕はその棚の方に歩きだした。



### 3：過ち（前書き）

ごめんなさい・・・。

### 3：過ち

『はあ、はあ、はあ……ここ……ここまてくれば……』

結構遠くまで走ってきた。

僕は土手にいた。

手には1体の人形が握られている。

記憶屋の店主、観神華織の隙について、特別品と思われる人形を1体掴み取り逃げてきたんだ。

土手に腰下ろし、人形を見る。エプロンをした女性の人形だ。

- - 主婦？ハズレか？選んでる時間なんてなかったからな。でも特別品だから大丈夫だろ - -

よく見ると名前が書いてある。

『加納アンナ？偶然にも苗字が同じとは……。』

僕は人形とおでこを合わせスイッチを押した。

- - カチツ - -

『おー、ヨシヨシ。お前の名前はアンナだ』

『あなた、本当にその名前にするの？ハーフでもないのに・・』

『いいんだよ。もう決めたんだ。』

- - あーあ、可哀想に。やっぱり親ってというのは自分勝手だ。この子もイジメられるぞ - -

彼女は案の定イジメを受けた。今は日本人でも珍しくもない名前だが、場面は結構昔なのか、友達にかなりからかわれている。

- - ほら見る。 - -

だが、そんな彼女は環境にも負けず、一生懸命に生きていった。後に一人の男性と結婚、第一子が誕生した。

- - なんか、この人強いな。でも、平凡な人生だ。なにが特別なんだ？ - -

『アンナ、でかした！ 見ろ、男の子だぞ！』

『はあ、はあ、可愛い、私の赤ちゃん・・』

『名前、どうするんだ？』

『はあ、はあ・・た、太郎・・太郎にするわ』

- - ! ! ! ? - -

- - なんだって？ - -

『私は日本人なのに、この珍しい名前でイジメにあったの。だからこの子にはそんな思いさせたくない。太郎なら普通の名前だから。』

- - か、母さんなのか?! - -

『ね、太郎』

彼女は赤ちゃんを抱きしめて涙を浮かべている。

- - わからない。なんで今まで気が付かなかったのか。  
母親の名前を忘れるなんて。 - -

(『あと、これも言い忘れてたけど、この他人の記憶を体験する行為には欠点があつて、自身の記憶が少し欠けてしまうのよ』)

- - 記憶が・・・欠けた・・・のか?  
まさか、そんな?

いや・・・あの人は確かにそう言っていた。  
でも、そんな事つて。 - -

『高い、高い!』

『きゃっ、きゃっ』

『アンナ見ろ、喜んでるぞ!』

『可愛いね』

『ああ』

- - ということは、これは母さんの記憶って事が。まさか母さんも僕と同じだったなんて。こんな痛い思いをして産んでくれて、生まれた事を喜んでくれて、名前だって、僕の事を考えてつけてくれたなんて。 - -

『お帰りなさい・・・』

- - えっ? - -

『・・・太郎?』

目の前に、成長した僕が立っている。学生服を着ているという事は、ごく最近の出来事か。何かブツブツと呟いていて、目が座っている。

『なんかむしゃくしゃするんだ。』

『どうしたの？何かあったの？』

『・・・どうしたの？・・・何かあったのだってえ！？』

- - な、なんだ？こんな事あったか？ - -

- - ドカツ！ - -

『キヤー！！』

記憶の中の僕は母親を蹴飛ばした。

『お前がつけた名前のせいでイジメられてるんだよ！』

『やめてえー！太郎！』

『その名前で呼ぶなあ！』

彼は母さんに対して執拗なまでに暴力をふるってきた。  
母さんの痛みが全て僕に注ぎ込まれる。

- - や、やめろ！母さんが死んじゃうだろ．．． - -

（『他人の記憶を体験すると、その記憶で経験した知識は勿論、身体的な記憶も取り込む事になるのよ。』）

- - 母さんが．．． - -

（『まあ、心と体は一体って事よね。心が、やってもいない筋肉トレーニングを記憶した事で、体もやったと思い込んだって感じかしら。』）

- - ．．．死 - -

『あれ？動かなくなっちゃった。くっそババアが．．．．．まだむしゃくしゃするな。外へ．．．行ってみるか。』

薄れゆく意識の中で僕は叫んだ。

- - 母さん．．．しな．．．ないで！ - -



観神華織は、入れたての紅茶を飲みながら、朝のニュースを見ていた。

外からは、夜が明けた事を告げる雀の話し声が聞こえてくる。ふとステンドグラスの出窓の棚に目をやった。

『あの子、どうしたかしら？』

（『待ちなさい！その人形はダメよ！』）

（『うるさいっ！これは特別なんだろ？！』）

『……特別……か。確かにそうだけど……。』

華織は一人言を漏らした。

- - とんとんっ - -

『ん？』

玄関から音がする。

- - ガランツ - -

ドアを開けると一人の男が立っていた。

『いらっしやいませ。』

『あ、あの、東大教授の記憶が欲しいんですけど。』

『はい、ありますよ。どうぞ。』

部屋に通された男は、ステンドグラスの棚を見て問いかけた。

『うわ、あの棚だけなんかすごいですね？豪華な感じで飾られている記憶も高価そうだ。』

『ああ、あれですか？ - - 』

華織は人形を選びながら、男の方を振り返りもせず質問に答えた。

『――あれはお亡くなりになった記憶保存者の人形ですよ。記憶保存の依頼に来られた方が亡くなると、もうその記憶は売り物にならないので処分するんですけど、その人形が騒ぐんですよ。あ、あったあつた――』

お目当ての人形を見つけた華織は男の方に振り向き、視線をステンドグラスの棚に向けた。

『――でも、あそこに一週間飾ると、鎮まって処分出来るようになるんですよ。』

『な、亡くなつた方の記憶……ですか？』

『ええ、使ってみますか？』

『ええっ？い、いや、結構です。』

『冗談ですよ、フフフ。』

『でも、売り物にならないって言ってましたが、使うとどうなるんですか？』

『それは――』

華織が言いかけた瞬間、ついていたテレビの中のアナウンサーが慌てた様子で原稿を読み出した。

『――続いて先ほど入ったニュースです。昨日未明、市で起きた加納アンナさん殺人事件の重要参考人として搜索されていた、長男の加納太郎さんが、川の土手で死体となって発見されました。現在司法解剖中ですが、警察関係者によりますと、死因は暴行によるものだとの事です。　　さん、この事件どう見ますか？』

『本当に不思議な事件ですね？母親が殺された家には、息子が着ていたとされる服が脱ぎ捨ててあったそうですが、それには母親の血痕がついていたとの事です。息子が母親を殺して、息子も同じ方法で殺された。本当に不思議ですね。』

『・・・・では続いて現場のリポーターの――』

『――そっか、持っていたのは、奇しくも母親の人形だったとはね。』

ニュース番組に目をやった華織は、ポツリと呟いた。

『えっ？』

『いえ、なんでもありませんよ。どうぞ、この人形です。』

華織は男に1体の人形を手渡した。

その口元には微かな笑みがこぼれていた。

（終わり）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0196e/>

---

記憶屋

2010年10月8日14時06分発行